浄土宗

じょうどしゅう

日常勤行式

にちじょうごんぎょうしき

こうげ

○香偈

……がーんがーしーんじょーにょこーろー

願我身浄如香炉●

ねーんねーんぼーんじょーかいじょーこー

念念梵焼戒定香

がーんがーしーんにょー ち えーかー

願我心如智慧火

く ようじっぽうさんぜーぶー

●供養十方三世●仏

〈書き下し〉

願わくは我が身浄き事香炉のごとく　願わくは、我が心智慧の火の如く

念々に戒と定の香を梵焼して　十方三世の仏に供養したてまつる

〈意味〉

香を焚くことによってすべての汚れを焼いて、

心と体が清らかになることを願い、

同時に香を焚くことによって仏さまを供養します

○三宝礼（さんぼうらい）

一心敬礼（いっしんきょうらい）

十方法界常住佛（じっぽうほうかいじょうじゅうぶー）

一心敬礼（いっしんきょうらい）

十方法界常住法（じっぽうほうかいじょうじゅうほう）

一心敬礼（いっしんきょうらい）

十方法界常住僧（じっぽうほうかいじょうじゅうそう）

〈書き下し〉

一心（いっしん）に敬（うやま）って十方法界常住の仏（じっぽうほうかいじょうじゅうのほとけ）を礼（らい）したてまつる

一心に敬って十方法界常住の法を礼したてまつる

一心に敬って十方法界常住の僧を礼したてまつる

〈意味〉

様々（さまざま）な所におられます仏さま、様々な仏様の教（おし）え、それらを信じ仏道（ぶっどう）に励（はげ）む人々（ひとびと）を心から敬（うやま）い礼拝します

○四奉請

しぶじょう

●奉請十方如来●入道場　散華楽

ほうぜいじっぽうにょらいじどうじょう　さんかーらく

ほうぜいせきゃーじょーらいじとうちょう　さんかーらく

奉請釈迦如来入道場　散華楽

ほうぜいしゃかにょらいにゅうどうじょう　さんかーらく

奉請弥陀如来入道場　散華楽

ほうぜいびだにょらいにゅうどうじょう　さんかーらく

奉請観音勢至諸大菩薩●入道場●散華楽

ほうぜいかんにんせいしーだいぼさつにゅうどうじょう　さんかーらく

〈書き下し〉

請じ奉る十方如来道場に入り給え　請じ奉る釈迦如来道場に入り給え

請じ奉る弥陀如来道場に入り給え　請じ奉る観音勢至、諸大菩薩道場に入り給え

〈意味〉

先ほど、この場や身を清めたので、この場所に様々な仏さまをお迎えさせていただきます

○懺悔偈（さんげげ）

我昔所造諸悪業（がしゃくしょぞうしょあくごう）
皆由無始貪瞋痴（かいゆーむしとんじんち）
従身語意之所生（じゅうしんごいししょしょう）
一切我今皆懺悔（いっさいがこんかいさんげ）

〈書き下し〉

我れ昔より造る所の諸々の悪業は
皆、無始の貪、瞋、痴による
身、語、意より生ずる所なり
一切我今皆懺悔したてまつる

〈意味〉

気が付かないうちに犯してきた過去の過ちを仏さまの前で懺悔し、
それを悔い改めることによって、心の中まで清める為の偈文です

○十念（じゅうねん）

〈書き下し〉　阿弥陀仏に帰依（きえ）したてまつる

〈意味〉　お念仏を十回お唱えすることによって極楽に往生することを願います

○開経偈（かいきょうげ）

●●無上甚深微妙法●（むじょうじーんじーんみみょうほう）

我今見聞得受持（がーこーんけーんもーんとくじゅじ）

●百千万劫難遭遇（ひゃくせんまーんごうなーんそうぐう）

●願解如来真実義●（がーんげにょらいしーんじつぎ）

〈書き下し〉

無上甚深微妙の法は　百千万劫にも遭い遇うこと難し。
我、今見聞し受持することを得たり　願くは如来の真実義を解したてまつる

〈意味〉

お釈迦様の説かれた教えに、人生の中で巡り合うことは難しいことです。
その現世の中で私たちは、教えを知ることができました。
その喜びとともに正しい教え受け、理解したいと心から願う
という意味のお経（偈文）です。

じゅきょう　しせいげ

○誦経（四誓偈）

我建超世願　必至無上道　斯願不満足　不為大施主
がーごんちょーせーがん　ひっしーむーじょーどー　しーがんふーまんぞく　ふーいーだいせーしゅー
誓不成正覚　我於無量劫　我至成仏道　誓不成正覚
せいふーじょーしょーがく　がーおーむーりょーこー　がーしーじょーぶつどー　せいふーじょーしょーがく
普済諸貧苦　誓不成正覚　志求無上道　普照無際土
ふーさいしょーびんぐー　せいふーじょーしょーがく　しーぐーむーじょーどー　ふーしょーむーさいどー
名声超十方　究竟靡所聞　浄慧修梵行　神力演大光
みょーしょーちょーじっぽー　くーきょーみーしょーもん　じょーえーしゅーぼんぎょー　じんりきえんだいこー
離欲深正念　浄慧修梵行　志求無上道　普照無際土
りーよくじんしょーねん　じょーえーしゅーぼんぎょー　しーぐーむーじょーどー　ふーしょーむーさいどー
為諸天人師　神力演大光　普照無際土
いーしょーてんにんしー　じんりきえんだいこー　ふーしょーむーさいどー

しょーじょーさんくーみょー
消除三垢冥
こーさいしゅーやくなん
広済衆厄難
かいひーちーえーげん
開彼智慧眼

めっしーこんもーあん
滅此昏盲闇
へいそくしょーあくどー
閉塞諸悪道
つーだつぜんじゅーもん
通達善趣門

くーそーじょーまんぞく
功祚成満足
いーしゅーかいほーぞー
威曜朗十方
にちがつしゅーじゅーきー
日月戢重暉

てんこーおんぷーげん
天光隠不現
いーよーろーじっぽー
為衆開法蔵
くーよーいっさいぶつ
供養一切仏

じょーおーだいしゅーじゅー
常於大衆中
せっぽーしーしーくー
説法師子吼
とくいーさんがいおー
得為三界雄

ぐーそくしゅーとくほん
具足衆徳本
がんねーしつじょーまん
願慧悉成満
つーだつみーふーしょー
通達靡不照

にょーぶつむーげーちー
如仏無礙智
こーせーくーどくほー
広施功徳宝
がんがーくーえーりき
願我功慧力

とーしーさいしょーそん　しーがんにゃーこっかー　だいせんおーかんどー

等此最勝尊　斯願若剋果　大千応感動

こーくーしょーてんにん　とううーちんみょーけー

虚空諸天人　●当雨珍妙●華

〈意味〉

ここでは仏様の教えが説かれている経典を読ませていただきます。

お釈迦様のたくさんの経典の中で浄土宗が教えの基としている経典が『無量寿経』、『観無量寿経』、『阿弥陀経』の三つです。その中の『無量寿経』に説かれている四誓偈を今日は唱えさせていただきます。阿弥陀如来が仏となる前に、法蔵菩薩として修行していた時に、人々を救うために決めた四つの誓いが説かれている為、「四誓偈」と呼ばれています。この誦経では、その時々で読ませていただく経典が変わります。『観無量寿経』の中から読む場合は、「真身観文」がほとんどです

回向偈（本誓偈・聞名得益偈・一切精霊偈・自信偈など）

えこうげ　ほんぜいげ　もんみょうとくやくげ　いっさいしょうれいげ　じしんげ

○聞名得益偈（阿弥陀様に向けての偈文）

もんみょうとくやくげ　あみださまにむけてのげもん

●其仏本願力　●聞名欲往生　●皆悉到彼国　●自致不退転

ごぶつほんがんりき　もんみょうよくおうじょう　かいしっとうひこく　じちふたいてん

〈書き下し〉

そほとけほんがんのちから　なきおうじょうほっ　みなことごとくかくにいたり　みずからふたいてんに至る

・其の仏の本願の力　名を聞きて往生せんと欲すれば　皆悉く彼の国に至って　自ら不退転に至る

〈回向偈の意味〉

はいどくおきょうのくどくあみだぶつたほとけさまのふむきょうをかぶぶんほうようないようによってよむおきょうをかえることがあります

拝読し終わったお経の功徳を阿弥陀仏やその他の仏様に振り向けるお経です。この部分は法要の内容によって読むお教を変えることがあります

○十念

じゅうねん

御法語（一枚起請文・発願文など）

○一枚起請文（元祖大師法然上人御法語）

唐土我が朝に諸々の知者たちの沙汰し申さるる観念の念にも非ず。また学問をして念の心を悟りて申す念仏にも非ず。ただ往生極楽の為には南無阿弥陀仏と申して疑いなく往生するぞと思いとりて申すほかには、別の子細候わず。但し

三心四修と申すことの候は、皆決定して
南無阿弥陀仏にて往生するぞと、思ううちにこもり候也。此外に奥深きことを存ぜば、二尊のあわれみにはずれ、本願にもれ候べし。念仏を信ぜん人はたとい一代の法をよく〳〵学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智の輩に同じうして、智者のふるまいをせずしてただ一向に念仏

すべし。

証（しょう）のために両手印（りょうしゅいん）をもってす。

浄土宗（じょうどしゅう）の安心（あんじん）起行（きぎょう）此一紙（このいっし）に至極（しごく）せり。源空（げんくう）が所存（しょぞん）此外（このほか）に全（まった）く別儀（べつぎ）を存（ぞん）ぜず。滅後（めつご）の邪義（じゃぎ）を防（ふせ）がんがために所存（しょぞん）を記（しる）し畢（おわんぬ）。

建暦（けんりゃく）二年正月二十三日（にねんしょうがつにじゅうさんにち）

大師在御判（だいしざいごはん）

○摂益文（しょうやくもん）

●光明偏照（こうみょうへんじょう）
●十方世界（じっぽうせかい）
念仏衆生（ねんぶつしゅじょう）
●摂取不捨（せっしゅふしゃ）

〈書き下し〉

如来（にょらい）の光明（こうみょう）は　遍（あまね）く十方世界（じっぽうせかい）を照（て）らして　念仏（ねんぶつ）の衆生（しゅじょう）を摂取（せっしゅ）して捨（す）てたまわず

〈意味〉

この偈文（げもん）は、阿弥陀如来（あみだにょらい）の光明（こうみょう）(慈悲（じひ）)が念仏（ねんぶつ）をしている全（すべ）ての人（ひと）たちを照（て）らし、一人（ひとり）も漏（も）れることなく救い取（すく）るということが説（と）かれています

○念仏一会（ねんぶついちえ）

南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）　南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）　南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）……

〈意味〉

浄土宗（じょうどしゅう）では「南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）」と唱（とな）えることによって極楽（ごくらく）に生（う）まれることを願（ねが）います。ここでは、一番大切（いちばんたいせつ）な修行（しゅぎょう）であるお念仏（ねんぶつ）を、皆（みな）さんと共（とも）に唱（とな）えさせていただき、亡（な）くなった方（かた）だけでなく自分自身（じぶんじしん）の功徳（くどく）も積（つ）んでいただきます

○回向（えこう）

願以上礼（がんにじょうらい）（戒名）　追善増進菩提（ついぜんぞうしんぼだい）

○総回向偈（そうえこうげ）

願以此功徳（がんにしーくどく）
平等施一切（びょうどうせーいっさい）
同発菩提心（どうほつぼだいしん）
往生安楽国（おうじょうあんらっこく）

〈書き下し〉

願わくはこの功徳を以て　平等一切に施し
同じく菩提心を発して　安楽国に往生せん

〈意味〉

この偈文は、この法要の中でお経やお念仏を唱えることによって得ることが出来た功徳を、ご先祖様や知っている人だけではなく、全ての人達に振り向けて極楽浄土に生まれることを願う一文です。

○十念（じゅうねん）

○総願偈

そうがんげ

●衆生無辺誓願度

しゅじょう むへんせいがーんどー

●煩悩無辺誓願断

ぼんのう むへんせいがーんだーん

●法門無尽誓願知

ほうもん むじんせいがーんちー

●無上菩提誓願証

むじょう ぼだいせいがーんしょう

●自他法界同利益

じた ほうかいどう りやく

●共生極楽成仏道

ぐしょうごくらくじょうぶつどう

〈書き下し〉

衆生は無辺なれども誓って度せんことを願う　煩悩も無辺なれども誓って断ぜんことを願う

法門は無尽なれども誓って知らんことを願う　無上の菩提を誓って証せんことを願う

自他、法界は利益を同じくし　共に極楽に生じて仏道を成ぜん

〈意味〉

他の人々を救い、煩悩を断滅し、佛の御教えを知り、悟りを体得するために、この世に生きている間は精一杯の生活をして、少しでも向上心を持ち続け、念仏の功徳によって極楽に往生しようと誓うお経です

○三唱礼（さんしょうらい）

南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）　南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）

南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）（節付き・三遍（ふしつき・さんべん））

〈意味〉

節（ふし）（音程（おんてい））が付いた「南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）」を礼拝（らいはい）をしながら三回（さんかい）唱え仏様（ほとけさま）を讃（たた）えます。

○送仏偈（そうぶつげ）

●請佛隋緣還本国（しょうぶつずいえーんげーんぽーんごく）

願佛慈心遥護念（がーんぶつ じ しーんよう ごねーん）

●普散香華心送佛（ふさーんこうけーしーんそうぶつ）

●同生相勧尽須来（どうしょうそうかんじんしゅうらい）

〈書き下し〉

請うらくは仏、縁に従って本国に帰り給え　普く香華を散じ心に仏を送り奉る

願わくは、仏の慈心、遥かに護念したまい　同生相勧む、尽く来るべし

〈意味〉

お迎えした仏様達を浄土に送り、これからも慈悲の心で護念していただけるようにお唱えします

○●十念（じゅうねん）

お勤め終わり（つとめおわり）